

『アレン中佐のサイン』の多面性

伊藤 かおり

一、はじめに

本稿では庄野英二の戦争児童文学作品『アレン中佐のサイン』を取り上げる。この作品は「岩波少年少女の本」叢書の第一八冊として一九七二（昭和四七）年一二月に出版された。挿絵はかつて『赤い鳥』の表紙を担当した深沢省三に依頼された。

『アレン中佐のサイン』は、庄野英二にとっては一九六三年に発表した『星の牧場』に次ぐ長編戦争児童文学となる。『星の牧場』と同様に、自らの経験や見聞をもとに更なる調査を経て発展・創造した作品である。特にこの作品には、庄野がジャワ俘虜収容所員として勤務した経験が活かされている。

庄野英二は一九一五（大正四）年生まれであり、関西学院卒業の翌年一九三七年から兵役に就いた。一九四〇年、南昌錦江付近での戦闘で負傷、内地に帰還する。その後暫くの内地勤務を経て、一九四二年七月、ジャワ俘虜収容所員に任命され、大阪を発った。九月初めにジャカルタに到着しチラチャップ・キャンプに勤務する。翌

年二月にキャンプが閉鎖されるとジャカルタ本所に転属し役所勤務となった。その後は南方各地を転々とし終戦時にはサイゴン在駐の独立混成旅団に配属されている。レンパン島での抑留を経て、一九四六年六月に復員するも、暫くはマラリヤの再発に苦しんだ。『アレン中佐のサイン』は戦後二七年を経た一九七二年に岩波書店より出版される。一九七七年には自らこれを戯曲化し、劇団民芸が上演、東京・大阪・京都にて公演を行った。

この作品の成り立ち、また出版から五年後に自ら戯曲化したことを考えても、庄野英二にとって思い入れの深い作品だったと推測される。当時、戦争児童文学として評価を得て話題となりながらも、今日改めて読み直すとその評価は必ずしも具体的かつ十分であったとはいえない。そこで、本稿では『アレン中佐のサイン』の戦争児童文学としての位置を再確認し、さらに文学として多面的な読みの可能性を示した上で再評価することを目的としたい。

二、戦争児童文学と『アレン中佐のサイン』

『アレン中佐のサイン』は椎崎中尉（後に大尉となる）を隊長とする俘虜収容所での交流の物語である。椎崎部隊は当初、メエルモウチヨ・キャンプにて俘虜五〇〇〇人を管理していた。ここでは俘虜と勤務隊兵士が互いに尊重し合い、文化的な営みを送るべく創意工夫しながら穏やかに過ごしていた。そこに飛行場設営の命令が下り、椎崎部隊と二〇〇〇人の俘虜がアンボン島に渡る。マラリヤと赤痢のために多くの俘虜と兵士が死亡する中、飛行場の設営を終えた椎崎部隊はモナ島に移動し、そこで終戦を迎える。俘虜代表のアレン中佐が椎崎大尉に「椎崎大尉とその部下たちは、われわれ連合軍俘虜を保護するために、極めて困難な状況の中にありながら、終始誠意をもってあらゆる限りの力をつくしたことを証明する。」（二三四頁）という文書とサインを預けて物語は終わる。

この作品は〈戦争児童文学〉というジャンルに位置づけられる。戦争児童文学とは、第二次世界大戦を題材として反戦平和の観点から描かれた児童文学であり、長谷川潮によると一九六〇年代半ばからこの名称が使われ始めたという。¹⁾〈戦争児童文学〉の成立について、さらに長谷川は次のように述べている。

しかし注意しなければならないのは、初めに戦争児童文学という枠組みがあつて、それから作品が生まれたのではないとい

うことである。作品のほうが先なのだ。作品がだんだんふえてきたから、それらについて考えるために戦争児童文学という枠組みが作られた。

枠組み以前においては、戦争の時代に生きてきた作家たちが、どうしても書かずにはいられないことを書いたら、それが戦争を対象にしていた、ということなのだ。もちろん枠組みが成立したあとでは、戦争児童文学を書く、という意識を作家が持つ場合もあるだろう。しかし現在でも、意識しない場合も当然ある。²⁾

一九六〇年代半ばに〈戦争児童文学〉というジャンルが成立するほど、戦争を題材とする児童文学が書かれた理由とは何か。よくいわれるのは、ベトナム戦争に対する危機感である。それ以前、一九五〇年には朝鮮戦争が勃発しており、戦争を知る世代にはまたいつ核兵器が使われ世界戦争に突入するかという危機感があった。一方で日本国内では平和は維持されていたが、戦争から既に二〇年が経とうとしており、子どもたちは戦争を知らなかった。この子どもたちに戦争をどのように伝えるかが課題となり始めたのもこの時期のことだった。

このような外的要因についてはしばしば言及されるが、作家自身の内的要因については顧みられることは少ない。児童文学とは子どもも読むことのできる文学である。文学とは人間を探究し人間に向

き合うものだが、児童文学はその特性上、人間の中でも特に（子ども）と向き合うことが多くなる。それは今を生きている現実の子どもたちを観察し寄り添うという方法をとることもあるし、かつて子どもであった自分と深く対話を重ねるという方法を取ることもある。一九六〇年代半ばは戦時中に少年時代を過ごした者たちが大人になり、児童文学作家として活躍するようになった時代である。そんな彼らが自らの子ども時代を振り返り対話したときに、それが〈戦争児童文学〉となつて表出するのは必然であつたといえよう。

ところで、戦争児童文学が多く出版され飽和状態となるとマンネリ化が進む。砂田弘は「戦争児童文学と現代」と題した評論で、自らもその域を出ないことを自覚した上で次のような批判を展開している。

ともあれ「戦争児童文学」に陸続と登場する、心やさしい平和主義者たちを前にして、私はとまどうばかりである。戦争を引き起こしたのは、ひとにぎりの軍人や政治家であつて、少年少女をも巻きこんだ、あの「聖戦」という名の狂気は、心の底では戦争を憎み、平和を願う大多数の民衆がまとわされたヴェールであつたというのが、多くの「戦争児童文学」に共通する基本的な構図となつているからである。民衆はもつぱら戦争の被害者であつたという見方が、そこから生まれる³。

この頃生まれた多くの児童文学作品が戦争に疑問をもち、戦争被害者としての子どもを描いた。しかし、主権が国民になつたとはいえ、戦争に賛同する空気を醸成した、その一翼を大衆は担つていたはずである。また、戦争についてはどの陣営も多かれ少なかれ被害者としての面と加害者としての面を併せ持つ。松谷みよ子『屋根裏部屋の秘密』のように加害の面を追及した作品はあるが、大部分は被害者としての面を語るに留まつた。

これら一連の戦争児童文学作品とは一線を画するのが『アレン中佐のサイン』である。これについては『星の牧場』と併せて言及する形で長谷川潮が「これもユニークな戦争児童文学⁴」と評しているが、多くの戦争児童文学作品に埋もれる形となつて、明確かつ詳細な評価が為されているとはいえない。この作品もやはり反戦平和の立場から書かれていることは、当時、戦争児童文学が盛んに発表されてきたこと、庄野英二自身が「私がなぜ、このような作品を書かねばならなかつたか」ということは、改めてしるすには及ばないことと思ひます。」（二四〇頁）と初出時の「あとがき」に記していることを合わせれば自明である。しかし、従来の戦争児童文学と大きく異なっている点は、主要な登場人物が全て軍人であり、子どもの視点はおろか、子どもに向ける眼差しさえ差し挟まれることがないという点にある。このような作品を児童文学として発表することで、庄野英二は何を意図したのであろうか。

さて、『アレン中佐のサイン』は俘虜収容所員たちと連合軍俘虜

たちとの三年に渡る交流を描いた作品である。全編が淡々と日誌のように描かれるが、例えば、第一二章は次のように始まる。

十日間の航海を無事におえて、五月四日夜半、松栄丸はアンボン港に入港し、夜明けを待って接岸した。

椎崎大尉は、アンボンのような小さい島に、このような大きな港があるとは思ってもみなかった。六、〇〇〇トンの汽船が、二隻同時に、着岸可能な岸壁があった。乗組員の話では、オランダの海軍基地だったということである。

埠頭に航空地区司令部の、連絡将校がきていた。椎崎作業隊は、アンボン島上陸と同時に、航空地区司令官の指揮下に入ることになっていた。

連絡将校は、一枚の地図を椎崎大尉に手渡して、俘虜収容所の開設位置が、バトドア高地であることを告げて赤鉛筆でしをつけた。(五六―五七頁)

このような記述の間に主人公であり俘虜を管理する側の椎崎部隊長の心の揺れ動きが描かれるものの、必要以上の感情の動きは描かれず、従って感傷も極力排除されている。椎崎はじめ勤務隊兵士たちは戦争に疑いを持たず、戦争を当然のものとして受け入れた上で俘虜収容所での任務をこなしていく。これは当時の兵士の多くの姿であったろう。そうすると前に挙げた〈戦争児童文学〉に対する

批判をここに当てはめることに無理が出る。

とはいえ、反戦をうたう戦争児童文学としての側面は確かに備えている。それが表れているのが、メルモウチヨ収容所の俘虜の内三〇〇〇人をタイービルマ鉄道の建設労働力として送り出す場面である。

俘虜たちは、自分たちを待ち受けている運命についてまきり知らなかった。

いや、椎崎でさえ知らなかった。

椎崎は、俘虜が鉄道建設に使役されることは知っていたが、かれらが、将来、人跡未踏の熱帯密林の中で、悪疫と、雨期の豪雨と、重労働と、栄養失調とで、続々とその生命の灯を消していこうなどとは、その時予想もしえなかったのであった。(五二頁)

情緒的な表現を排し、その後俘虜たちの身に何が起こったかを羅列することで、戦争の非人道的な面を提示している。

三、底流する教養と芸術への志向

ここからは従来の〈戦争児童文学〉としての枠に留まらない解釈を試みたい。

椎崎中尉を隊長とするメルモウチョ・キャンブの勤務隊幹部には職業軍人がいるとの記述がなく、物語を通してそれぞれの登場人物の教養の高さが窺える。全てではないが各人の背景に従軍前の営みが透けて見える。また、それぞれの人物が誠実で、食料や水の確保、衛生状態の保持という責務のために力を尽くす様子が描かれる。

椎崎部隊長は、もとは一年志願兵上がりの予備役の少尉であり、東京の大学の英文科を卒業後、郷里・宮崎の女学校の英語教師をして、そこで妻子をもった。昭和一二年に日中戦争が始まると召集され内地勤務を繰り返す内に中尉に昇進した。太平洋戦争開戦後の昭和一七年七月、ハーグ条約に従い、日本政府は南方占領地各地に俘虜收容所を設置することを表明し、それに伴い椎崎はジャワ俘虜收容所に任命され、メルモウチョ・キャンブの部隊長に就任した。椎崎は身長一八五センチメートル、運動神経はきわめて鈍感で、気質は穏やか、人と争うようなことがない人間だった。「郷里のいなかで、静かに本を読んで、つましく暮したいというのが唯一の念願」(二四頁)であり、「人を押しつけてでも、すばしこく要領のいいことを、まるで美德のようにしている軍隊」(一四頁)も向かないため、俘虜收容所の所員に任命されたのだろうと自身で推測している。勤務にかけひなたがなく部下を大切にするため、物語を通じて部隊の連帯が途切れることはない。また、どの俘虜とも親しくし親身に相手のことを考えるので、部下には「うちの親父は俘

虜に甘いからなあ」(二三八頁)と陰口をたたかれることもあった。英文学を専攻していたため、俘虜たちと価値観を共有することが可能だった。

椎崎にはメルモウチョ・キャンブを運営するに当たったの懸念事項が幾つかあった。その第一が俘虜となることを恥とする日本人の考えが俘虜に対する軽蔑につながりかねないということである。加えて、軍隊には私的制裁(ビンタ)の悪習があり、それが俘虜に対して為されることを恐れていた。勝利者の優越感情、言葉の不通や、日本とヨーロッパとの風俗習慣の違いが及ぼす影響も考えに入らなければならなかった。その対策として椎崎が行ったのは、まず法規や条令の研究であり、ジャカルタ本所の指令に基づいて正しく任務を遂行するよう努めること、俘虜に対して敵味方の感情に捕われず中立の立場を守ることを部下に繰り返し教育すること、私的制裁を禁止することだった。ここに特筆すべきは、椎崎が部下に対しても俘虜に対しても力による管理を行って自らの理念を粘り強くは部下に対して「教育」という方法を用いて自らの理念を粘り強く浸透させていった。そのため、第二〇章では、アンボン島で過酷な環境と労働のために病気に倒れた俘虜たちをジャワに移送する際に同伴させた兵士たちは、苦労している仲間を見捨てることができず、任務を遂行した後アンボン島に戻った。椎崎は俘虜たちに対して「対話」という方法で信頼を勝ち得た。両者ともに対して暴力ではなく言語を用いた対応を行っていた。これは教養があればこそで

きることである。作品の底流を成しているのは教養と芸術への志向である。

椎崎隊長は俘虜代表のアレン中佐と武士道と騎士道について対話を交わした。徳佐軍曹（後に伍長）は博物学を通じて俘虜のバートン大尉と交流を持った。メエルモウチョ・キャンプでは俘虜たちの持っている本を一堂に集めて図書館を開設し、誰でも読書を楽しめるようにした。また、俘虜たちの展覧会を開催して日々の余暇に明かせて制作された作品を展示した。椎崎が運動不足に陥りがちな俘虜のために「キャンプ体操」を創案したこともあったが、その際には数人編成の音楽バンドを結成し、その演奏に合わせて体操をした。モナ島では教会の壊れたオルガンを直して演奏会を行ってもいる。勤務隊と俘虜たちは生存さえも容易ではない環境の中で創意し、文化的な生活を送れるよう工夫してきた。

さて、このような部隊の在り方を見て思い出されるのが『ビルマの豎琴』である。第一高等学校教授であった竹山道雄が児童雑誌『赤とんぼ』に一九四七年から四八年にかけて連載したもので、戦後児童文学のベストセラーでもあった。ビルマ僧が豎琴を弾くなど、あまりにも現地の慣習と異なる描写に後年批判が噴出した。『ビルマの豎琴』に関しては高田里恵子が『文学部をめぐる病い』において新たな解釈を行っている。そこでは、『ビルマの豎琴』について「ドイツの戦争物語に一高生たちをそと送りこんだ、日本的学校物語⁵⁾」という読みを示し、主人公の水島上等兵を一高出身で

はないが「永遠の一高生⁶⁾」として描かれていると規定し直した。『アレン中佐のサイン』の椎崎部隊も「教養主義」とまではないかないまでも、戦争で想起される破壊と暴力を志向するものではなく、教養と芸術、そしてこれらによってもたらされる調和を希求するものであった。

四、作品の構成と聖書

もう一つ、この作品において特筆すべきなのは第一章の存在である。この章は「ヨブ記と詩篇」と題されて、アンボン島でマラリヤと赤痢によつて次々と俘虜や勤務隊兵士たちが死んでゆく中、アレン中佐が救いを求めて聖書を読む場面で成立しており、その殆どが聖書の文句で構成される。「ヨブ記」は神に忠実なヨブが神と悪魔に試された末、その信仰の堅さを認められる物語である。ヨブは試練の中で財産をすべて失い悪疫に襲われて瘡だらけになり姿も分らない程になった。その苦悩はアンボン島の俘虜や兵士の苦痛と重なる。ここで引用されたのは四〇章と四二章であり、これは神との論争を通してヨブが自らの信仰をあらためて確固たるものにする場面である。

後半では「詩篇」から一三六篇、一三七篇、一三八篇が引用される。一三六篇は苦難からの神の救い、一三七篇はバビロン捕囚の嘆き、一三八篇はダビデの歌とされており神の栄光を讃えるものであ

る。ここにおいて、アレン中佐が何を思ったかは描かれていない。ただ、この苦難の時においてアレン中佐が絶つたのが「ヨブ記」と「詩篇」であったことが述べられるのみである。

物語としてはここで一つの転換点を迎える。「ヨブ記」に象徴される苦難から「詩篇」に収められた神の栄光へ、俘虜と兵士にも一抹の希望が見えてくる。アンボン島の過酷な環境と厳しい労働に翻弄されていた部隊の試行錯誤の末、様々な工夫が功を奏し始めたのだ。アンボン島において水の確保を第一の責務として任された徳佐軍曹は密林を踏査し、竹の水道管を架設することに成功した。これで恒常的に清潔な水を確保することができた。それでも決して十分といえる量ではないので、徳佐軍曹は水を無駄にする者には俘虜と兵士とを問わず叱った。部隊の兵士と俘虜が同じ意識をもって困難に取り組んでいることは「俘虜は、いくら徳佐が水のことでも口やかましくいっても、恨みに思う者はいなかった。徳佐が部隊全員の生命を守る水について責任を感じていることをよく知っていた。」（九二頁）という記述からも窺える。ここにはバビロン捕囚時のイスラエルの民にも喩えることのできる連帯が見られる。また、食料の調達も軌道に乗り始めた。食料調達を責務とする狩場主計軍曹は、アジの大群が海岸に迫った時、椎崎の許可を得て手榴弾を用いて漁をしたが、手榴弾を戦闘以外で用いるのは軍律違反であった。しかし、続く脚気患者や栄養不良の病人のためには必要であり、この件で密告をする者もなく問題にならなかった。

この作品全体を見渡すと旧約聖書の物語を彷彿とさせるような構成を取っていることがわかる。ジャワ島メエルモウチヨという楽園を追われてアンボン島で苦難の時を耐え、そこを脱出して再びジャワ島へ戻ろうとする。このような動きはモーセのエジプト脱出やバビロン捕囚を想起させる。椎崎隊の母胎となったメエルモウチヨという地は庄野英二の創作したいわば架空の地名であるということが「あとがき」で明らかにされている。それ以外の主要な地名は全て実在するものだ。メエルモウチヨはこの物語においては楽園であり、俘虜たちはそこでは搾取されることもなく、行動が制限されるものの創意工夫をして文化的な生活を営んでいた。

椎崎がキャンプ内を巡察して歩いていると、よく俘虜たちが声をかけてきた。

「ジャワへはいつ帰れるのですか。」

「メエルモウチヨ・キャンプへ早く帰りたい。」

などといった。（二〇七―一〇八頁）

これはアンボン島での遣り取りだが、椎崎と俘虜たちはメエルモウチヨを離れて以来、幾度となくこの遣り取りを繰り返している。飛行場設営のために赴いたアンボン島では、キャンプ地としてバトドア高地が割り振られたが、そこは宿舎や衛生的な便所の設営に困難をきたすほど岩盤が固く、さらに水も容易に手に入れない土

地であった。衛生状態は最悪で、ためにマラリヤと赤痢が流行する。アンボン島に上陸した当初は一二〇〇名の俘虜と一〇〇名の勤務隊員がいたが、ここを去る頃には俘虜が二〇〇名、勤務隊員は五〇名にまで減った。

飛行場設営の任務が終了しジャワ島への帰還命令が出るものの、戦局の悪化でジャワ行きの船が見つからない。部隊はアンボン島からセレベス島マカッサル、同島ケンダリーと盪回しにされ、最終的にムナ島ラハに当座のキャンプを作ってジャワ行きの船を待つことになった。結局ジャワ島には戻れず、ここで終戦を迎える。

ただ、ここで忘れてはいけないのは、モーセのエジプト脱出やバビロン捕囚を連想させるといっても、彼らは飽くまでも俘虜収容所の部隊であるということである。メエルモウチヨは兵士と俘虜の友情を育む場所となったが、真の楽園ではない。終戦後、部隊は俘虜をマカッサルまで移送するように命令を受けるが、勝利を感じ取った俘虜たちは嬉々として船を漕ぐという重労働に取り組んだ。戦争が終わり、メエルモウチヨは楽園としての輝きを失った。

五、様々な倫理的規範

アレン中佐は聖書を携行し、それを拠り所に俘虜生活を送っていた。これまで見てきたように作品中には聖書が反映されている部分が多いが、それ以外にも様々な倫理的規範が見られる。それこそ

登場人物各人にそれぞれの倫理的規範があり、それが守られることよってこの部隊は秩序を維持できていたともいえる。例えば、椎崎隊長はメエルモウチヨ俘虜収容所長に就任するに当たって俘虜の扱いに関する国際法や条令を研究し、それに従って収容所を運営するように努めた。加えて、椎崎の元々の性質や英文学によって得た教養が俘虜を人道的に扱うようにさせた。

椎崎はメエルモウチヨ勤務の間に、日本の武士道精神とイギリスの騎士道精神についてアレン中佐と語り合ったことがある。その話題はアンボン島を出航してモナ島に到る前、海上で敵機からの空襲を受けたときに再び出現する。船が標的とされ俘虜の数名が犠牲となった時、混乱の中で武士道精神についての遣り取りがあった。次に引用するのは、椎崎が混乱のさなかの遣り取りについて回想し分析する場面である。

俘虜たちはあの時脅怖におののいていた。もしかすると、敵機の攻撃に狂乱した日本軍は、血迷って俘虜を射殺するのではないだろうか——それを案じてアレン中佐がとびだしてきたかもしれないなかった。そこで椎崎は、「日本軍人には武士道精神がある。あくまで俘虜の生命は守りぬく。」というつもりで、あんなことを叫んだのにちがいがなかった。

椎崎は仰々しく、武士道精神なんていったことが、後になつて恥ずかしくてたまらなかった。アンボン島における俘虜の大

量病死のことを考えると、いまさら空々しく武士道精神なんて口にできることではなかったのである。(一一一〇—一一二頁)

椎崎が武士道精神について口にすることを恥ずかしく思うようになったのは、アンボン島で多くの俘虜を病死させたことがきっかけである。逆にいえば、椎崎の立場からすれば俘虜たちを保護すること、その任務を完遂することこそが武士道精神の実現であった。椎崎の心にはアンボン島でその後も影を落とす。それは敗戦を知った時の動揺に最も表れている。淡々と日誌のように描かれてきた作品の中で、最も心情描写に力が入られた場面である。椎崎はポツダム宣言の内容を知り、戦争犯罪人として死刑に処される未来を恐れた。そんな自分を客観視して「おびえきってしまったている自分自身がぶざまでならなかった。」と自嘲し、そんな自分が武士道精神を口にしたことを恥じる。さらに椎崎の煩悶は続く。

椎崎は、「自分はいつたい、俘虜を虐待したであろうか」と何回も自問してみた。

戦争犯罪人とは、いつたい誰をさすのであろうか、東京の大本営にかぎられるのであろうか、各地の方面軍司令官や、軍司令官、兵団長、を意味するのであろうか、それとも、全将校を対象とするのであろうか、まさか下士官や兵隊にまで、責任が追及されようとは思われない。しかし、「俘虜を虐待した者を

ふくむ」と唱われているかぎり、俘虜収容所勤務者の場合には、将校、下士官、兵隊の区別なしにその責任が追及されるのではなからうか。

椎崎大尉は、メエルモウチョ・キャンプのことを思い起こしていた。もしメエルモウチョ・キャンプの、あの当時の状態のまま敗戦の日をむかえていたならば、こんなにポツダム宣言をおそれることもなかったのであった。

椎崎は、ポツダム宣言を読んで、おびえきってしまったている自分自身がぶざまでならなかった。

かつて、アレン中佐と、日本の武士道と、英国の騎士道について、語りあったこともあった。

椎崎は「武士道とは死ぬこととみつけたり」という、葉がくれ論語や、軍人にあたえられた明治天皇の、勅諭の中の、「死を鴻毛の軽きにおく」という言葉を引用して、日本の武士道、およびその精神的流れをくむ日本軍人は、いさぎよい死生観のうえに立つて行動していることを、誇らし気に語ったのであった。ところが椎崎は今、死刑の恐怖におのいて歯の根も合わずふるえつづけているのであった。

椎崎は夜が更けてもまんじりともしなかった。——まさか死刑になることもあるまい、いや軍事法廷のことゆえ、簡単に死刑に処せられるかもわからない。

自分にも罪がある。

いや、自分には罪がない。

罪がないつもりでも、俘虜收容所長としての責任は逃れられない。
頭の中が熱くなり狂いそうになっていた。

椎崎はいっそ軍事裁判から逃れるために、脱走することも考えてみた。(二二二—二二三頁)

この椎崎の煩悶は、庄野英二自身の動揺そのものだった。庄野は全集の「年譜」で終戦の時のことを次のように回想している。

(略) 八月十五日、各部隊の代表者は司令部に集合せよと命令があったので司令部に出頭しそこで初めて同盟通信(現共同通信)のガリ版刷りのニュースによりポツダム宣言を読んだ。「俘虜を虐待せる者を含むすべての戦争犯罪人は嚴重に処罰せらるるべし」の一項を読んで身体中の血が凍る思いがした。その後、国の行く末より自分の運命がどうなるのか戦戦恐恐のうち日を過ごすことになった。「自分は俘虜を絶対に虐待してはいない。しかし、俘虜收容所に勤務したために有無をいわせず戦争犯罪人に指名されるのではないか」と明けても暮れても自問自答した。(略) イギリス東南アジア軍司令部の日本語新聞が配布されるようになったが、私のジャワ俘虜收容所時代の上司や同僚が既に始まった軍事裁判で続々と絞首刑に処せられ

ていた。レンバン島では密林を開拓し農耕による現地自活を連合軍に要求せられており食料乏しく抑留者は空腹に苦しんだが、私は空腹以上に絞首刑の不安に脅えていた。⁷⁾

庄野は復員後暫くして巣鴨拘留所に戦争犯罪の容疑者として二か月ほど拘留され、結局何の咎めもなく釈放された。『アレン中佐のサイン』は南方占領地に勤務していた頃の経験が発想の土台にあることは確かだが、アンボン島での苦役など、多くは作品執筆のために新たに調査し知り得たことが基になっていると思われる。その中で、この椎崎の動揺は明らかに庄野自身の動揺であった。

しかしながら、椎崎の動揺はある明確な着地点を与えられる。日本の敗戦によって互いの立場が逆転し、別れの時がやってくる。その時、アレン中佐は椎崎隊長にメモ書きとサインを残した。「椎崎大尉とその部下たちは、われわれ連合軍俘虜を保護するために、極めて困難な状況の中にありながら、終始誠意をもってあらゆる限りの力をつくしたことを証明する。」(二三四頁)と書かれたそれは、椎崎が戦争犯罪人として裁かれる時に力を発揮する無罪の証明だった。この文言には椎崎部隊の三年間が総括されている。さらにアレン中佐は次のように語った。

「——あなたが、終始武士道の精神を發揮して、わたしたち俘虜を保護してくれたことにたいし、わたしは心からのお礼を

もうしあげたいと思います。わたしも、騎士道の精神をもって、今日まで立派な俘虜でありたいと念願してきました。マカツサルへつけば、多分おわかれることと思います。どうかお元気で。」(二三三頁)

多くの俘虜を守ることができず負い目を感じる椎崎は「武士道」という言葉に冷や汗を禁じ得ない。ただ、同時に注目したいのは「わたしも、騎士道の精神をもって、今日まで立派な俘虜でありたいと念願してきました。」というアレン中佐の言葉だ。アレン中佐に関してはその心情が描写されることは全くなかったが、この言葉にはアレン中佐の三年間の葛藤が見える。アレン中佐にとっても「騎士道の精神」という規範がなければ「立派な俘虜」であることは難しかったということが窺える。

兵隊と俘虜という優越と劣等の感情が少なからず介在する関係で、その上で苦難と立場の転換を経た時に、どのように互いを尊重し合い、それを維持できるのか。それはそれぞれの倫理的規範に従って努力し行動することであると、この二人の関係は物語っている。

六、児童文学としての『アレン中佐のサイン』

さて、ここまで見てくると『アレン中佐のサイン』は児童文学か

という疑問が湧いてくる。戦後二七年を経て出版されたこの作品には使われなくなつて久しい軍用語が頻繁に現れ、しかも注釈が付くことが少ない。少年少女向けとして刊行されているが、例外はあるとはいえ主要人物に少年少女が登場しない希有な作品である。そのヒントとして庄野英二の児童文学の師である坪田譲治の児童文学観を繙いてみよう。ここには児童文学の芯ともいえる理念が端的に示されている。

児童文学の作品も一面においては象徴的で、この世界を生きた姿として包含していなければなりませんし、また一面にはその部分を描いて、全体がわかるといふほどの正しさと正確さをもっていなければなりません。

これはおとなの文学においても同様でありますけれども、児童文学においてことに要求されるゆえんは、子供は幼少時代に得た世界認識をものさしとして生長してゆくものだからであります。⁸⁾

子どもの世界認識の形成には様々な方法があるだろう。生活や遊びや教育、さらにはそれらの中で揺れ動き爆発する感情など、様々な要素がかけ合わされて世界認識は形成されていく。当然、児童文学もその一つとなる。児童文学にはそれぞれの作家の世界認識が表れる。それは現状をどのように捉えているかでもあり、どのような

未来を築きたいかという理想の場合もあるだろう。

『アレン中佐のサイン』は戦争児童文学として反戦の主張をもちつつ、その上でさらに包括的な世界観・人生観を提示している。それは苦難や試練を解決し、調和へ導こうとする人間の力・志向であり、その目指す調和こそが楽園の姿であった。それは庄野英二の他の作品にも通底するテーマである。

テキスト

庄野英二『アレン中佐のサイン』一九七二年二月六日、岩波書店

参考文献

『庄野英二全集 第一巻』一九七九年五月一〇日、偕成社

『庄野英二全集 第十一巻』一九八〇年三月一〇日、偕成社

長谷川潮『戦争と平和』子ども文学館 別巻』一九九五年二月二五日、日本

図書センター

『砂田弘評論集成』二〇〇三年五月二六日、てらいんく

高田里恵子『文学部をめぐる病い——教養主義・ナチス・旧制高校——』二

〇〇六年五月一〇日、筑摩書房

坪田譲治『新修児童文学論』一九六七年一月一〇日、共文社

注

(1) 長谷川潮『戦争と平和』子ども文学館 別巻』一三頁。

(2) 同右一七頁。

(3) 『砂田弘評論集成』二二二頁。初出は『日本児童文学』一九八三年八月号。

(4) 長谷川潮『戦争と平和』子ども文学館 別巻』三三三頁。

(5) 高田里恵子『文学部をめぐる病い』二七八頁。

(6) 同右三三一頁

(7) 『庄野英二全集 第十一巻』四四一—四四二頁。

(8) 坪田譲治『新修児童文学論』一二二頁。